
カメ子と天使

東西南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメ子と天使

【Nコード】

N 8 6 1 3 D

【作者名】

東西南北

【あらすじ】

ちよつと不真面目な天使の俺アキエルが人間のカメ子に会いに行くが 会いに行くんじゃなかった……。カメ子が忘れている、俺とカメ子の関係……。 無期限更新停止

第1話 暴力天使からの仕事

ここは天界。

神と天使が居る世界。

俺は天界の建築物の裏手、人気の無い場所でタバコをふかしながら暇潰しにエロ本を読んでいた。

仕事をサボってだらだらと過ごす。至福の一時つてのはこのことだな。

俺は口から白い煙を吐き出した。煙はドーナツのような形を作ると澄んだ空気に溶けていく。

俺はタバコをくわえ直し、本のページをめくる。

不意に視界が翳る。嫌な予感がした。

目線をそろそろと上げると二本の足が。続いて純白の衣と翼が目に入った。

目の前に立っていたのは歳上（人間でいえば三十代前半）のきつそうな女天使。

女天使はしゃがみこむと俺のくわえていたタバコを奪う。顔には『

怒』としか読み取れない表情を浮かべている。

般若みたいだな。

女天使はタバコをもみ消すと、怒りを押し殺した声で言った。

「こんな所で何をしてるのかしら？」

「見て分かんない？」

俺は持っていた本を突きつけた。（もちろん女天使に内容が見える向きで）

「エロ本読んでんの」

「なあにが『エロ本読んでんの』よ!!」

言葉と同時に拳が飛んできた。とつさにエロ本でガード。

しかしエロ本は薄いため悲惨な末路を遂げる。ズボツという音と共に女天使の拳が女（マリちゃん20歳）の裸体に風穴を空けた。ギリギリで拳は俺に届かなかったものの

「ひつで、マリちゃんの身体があ」

俺は女天使の腕に突き刺さったままのエロ本を見つめる。

短い間だったけどありがとう。バイバイマリちゃん。

俺がマリちゃんとの別れを惜しんでいる（まだ読み終わってなかったからね）と、女天使は無情にもエロ本をむしりとり、地面に叩きつけた。

女天使は怒りをどうにか鎮めようと深呼吸している。それは成功したのか、女天使は笑顔を作ると俺を見た。

「アタシの話を聴いてくれるかしら？」

「ヤだ」

女天使の顔にピシッと青筋が入った。それでも笑みを壊さずに猫なで声でもう一度言う。

「とくっても大事な話なの。聴かないと後悔するわよ?」

「そこまで言われると意地でも聴きたくないね」

女天使の青筋がまた増えた。握りしめた拳がわなわなと震えている。怒りを我慢すんのも限界かな。じゃあとどめの言葉をプレゼントしよう。

女天使の顔に自分の顔を近づける。俺は天使の微笑みを浮かべて言い放った。

「よく見ると皺だらけだね。オバサン」

「オ、オバサンですってえゝ！？」

笑みは崩れて再び般若になる。怒りのオーラが目に見えた。

「アタシがオバサンならアンタなんてガキよ！大体天使のくせに仕事サボるはタバコ吸うはエロ本読むは…！天使を何だと思ってるの！？天使というのは清く正しく……」

今度は説教？

俺説教キライなんだよね。こういう時は逃げるが勝ちだ。

俺は身体を前に倒して両手をつき、勢いをつけて両足を持ち上げる。一瞬の逆立ち状態。そして手に力を込め、勢いと身体のパネを利用して跳躍。弧を描き、俺の身体は女天使を飛び越した。そのまま綺麗に着地、と同時に翔ぶ。

「！待ちなさいっ！！」

女天使が俺の後を追いかけて翔ぶ。だが俺の方が速い。やっぱり美少年とオバサンの差かな。いやぁ歳はとりたくないね。

俺は更にスピードを上げる。女天使との距離はぐんぐん広がった。余裕ぶってる俺に女天使の叫ぶ声が聞こえる。

「あなた堕天使になりたいのっ!!」

堕天使っ!?

俺はスピードを落とし、地に降り立つ。数十秒後女天使がやって来る。

女天使が地に降りるのを確認した俺は、軽薄な笑みを浮かべて言う。

「へえ、俺ってまだ天使だったんだあ」

「アナタと話す前に」

女天使が顔を上げた。まだ般若だった。

「アナタを思う存分殴っていいかしら？」

「ダメ。暴っ力反対」

そう言っても女天使は止めなかった。力のこもったパンチが俺の顔面に飛んでくる。首を曲げ避けた。

女天使は諦めずにもう一発パンチを放つ。そのパンチは上体を軽く反らし避ける。

しばらく、女天使のパンチを俺が避けるということを繰り返す。

やがて諦めたのか体力が尽きたのか、女天使はガックリと肩を落として座りこんだ。

「もうへばったのっ？」

オバサン。

声に出して言いたかったけど、これ以上茶化すと話が進まない。

疲れきった女天使を見る。そういえば俺はこの女天使の名前を知らなかった。

「今更聞くのもなんだけど…あんた誰？　もしかして俺のファン？」

「違いますっ！！！」

女天使は勢いよく立ち上がって咳払いをし、話始めた。

「アタシは458539番天使。あなたは666666番天使で間違いないわね？」

俺の返事を待たずに続ける。

「アタシはラグエル様に『墮落しそうな天使がいる』と言われて様子を見にきたの」

「つまり俺の事が」

女天使は「そう」と頷いた。

「墮落する天使が多いのよ。天界としては、これ以上悪魔側に仲間を増やすことはしたくないの。たとえアナタのような天使でもね」

＜アナタのような>に力を込めて言われた。

俺みたいなのが天使なのが、女天使には不服らしい。

女天使が不服だろうと、俺は天使として生まれたんだからしょうがない。

文句があるなら俺達を創りだした我らが父　神にでも言えればいい。

俺はあくびをすると、その場を立ち去ろうとした。

「ちょっと！！ 何処へ行くの！！」

女天使の慌てたような声に、仕方なく答えてやることにする。

「ラグエルに言われて様子を見にきて、アンタは俺の様子を見た。だったら俺にもう用はないだろ。こうみえても忙しいんだよね」

「忙しい？」

女天使が怪訝そうに問う。

「これから昼寝タイムなんだ。邪魔しないでくれる？」

「邪魔するに決まってるでしょ！！！！」

またまた性懲りもなく拳を繰り出してきた。
手の早い天使だな。

一歩後ずさり、かわす。

女天使は次々と拳を放つ。（もちろん俺はその全てを避けてる）

「アナタに仕事の話があるのっ！」

「無理無理、俺が仕事するわけないじゃん」

「この仕事が上手くいったら神様に願い事を叶えてもらえるとして
も？」

「願い事を？」

「ええ。ただ……」

女天使は拳を放つのを止めると、クリップで留められた紙の束を取り出した。

「詳しくはこれに書かれているけど、人間界での仕事で難易度はSランク……ってちょっと!？」

俺は話の途中で女天使の手から紙の束を奪うと飛び立つ。

「この仕事俺がやるよ!!」

何か女天使が叫んでいたけど、俺は構うことなく下界への門へ向けて飛んだ。

この仕事を受けたのは願い事を叶えてもらえるからだけじゃない

人間界へ行きたかったから
アイツに会ってみたいから

第1話 暴力天使からの仕事（後書き）

小説書くの久しぶりです。

読んでくれた方ありがとうございます！

第2話 カメ子登場

下界に降りたのは初めてだった。

場所は日本のそこそこ栄えたところある街

なんだコレ……

すげえキモチワルイ。吐き気と頭痛がする。

空中に留まってられず、地に降りた。

原因は

空気、か？

天界と違う。

俺だっけ全く同じだとは思ってない。が、さすがにここまで酷いとは……。

こんな空気を吸ってなんともないなんて、人間ってのはたくましいな。

とりあえず俺が下界に来ようと思った目的の一つ、ずっと会いたかった女探しをすることにした。

一時間後、動物やら植物やらに聞き出して、俺は会いたかった女がいる場所を突き止めた。

この時間帯（13：15）は中学校にいるとのこと。

当然俺はそいつに会いに中学校に来ていた。

場所は体育館。女生徒達がいた。

午後の昼下がり、五時間目の授業は体育だった。科目はバスケット。

目的の女の体操服の左胸には《亀山》と刺繍されている。女 亀山は試合に出ていた。

俺は試合を得点ボードの横に立って見ることにする。

亀山は誰にもマークをされていなかった。

にもかかわらず、仲間からボールを回されることもなかった。

完全に戦力にされてないな……。

亀山もそれを知っているのか、皆の邪魔にならないようコートの隅にポツンと立っているだけだった。

試合中、亀山は一度だけ転がってきたボールを拾ったものの、ボールを持ったままおどしている間に敵チームに取られてしまった。チームメイトは呆れたように亀山を見ていた。

亀山は何もしないため、（むしろ足を引っ張っている）亀山のいるチームは四対五で戦っていることになる。

試合の勝敗はいうまでもない。

チャイムが鳴り、体育館からぞろぞろと人が出て行く。

「負けた〜」

「カメ子のせいだよ」

「あいつグズだしウザイよね」

カメ子（亀山）のチームメイト達も文句を言いながら体育館を出て行った。

最後まで一人残っているのはカメ子。

正直にいつて、カメ子は期待外れだった。

時間を無駄にしたな〜。後はテキト〜に下界の観光をして帰るか。ぶっちゃけ仕事はどーでもいいし。まずはマリちゃんでも探すか。……ん？

「あのー……」

気が付けばカメ子が目の前にいた。しかも俺に話しかけてる。

いまさらだが一応補足しておく。

天使は精神体。人には普通見えない。

はずなのにまさか、見えてる？

「その格好もしかして天使のコスプレですかっ？」

しっかり俺を見て言っていた。眼をキラキラさせながら。

めっちゃめっちゃ見えてんじゃん。

「その服自分で作ったんですか？　すごい似合ってますねー！　本物の天使みたいっ！！」

興奮したカメ子は俺の自慢の（うちの一つである）純白の羽根を触ろうと

手を伸ばしてきたのでその腕を曲がらない方向にひねってみた。

「痛いっ痛いっ痛いっ！！！」

カメ子がじたばた暴れるから放してやった。

カメ子は腕をさすりながら、恨めしげに俺を見た。

羽根に触ろうとする方が悪い。

カメ子は懲りなかった。

いきなり触ろうとしたのがまずかったと思ったのか、

「あのー、触ってもいいですか？」

今度は聞いてきた。

「もしかして外人さんだし日本語通じない？ 英語だなんて言え
ばいいのかなあ？」

一人で悩んでる。てか、外人⇨英語だと思ってるのか。英語圏じゃ
ない外人だっているんだぞ。

「ねえカメ子」

「何？ って日本語喋れたんだ……」

「俺外国人じゃないんだよね」

「ええっ！？ 日本人だったんですか？ 金髪だし、瞳も青だから
てつきり外人さんかと……」

「日本人だとも言っていないんだけど。そもそも俺人間じゃないし」

「人間じゃない??」

カメ子は意味が分からないとでもいうように目をぱちくりさせる。

「この姿見れば分かるだろ？」

俺はゆつくりと羽根を羽ばたかせた。

カメ子は俺の姿をしばらくの間じつくりと見つめた後、恐る恐る言う。

「ほ、本物の天、使？」

「ピンポーン　　当たたり〜」

もしも自分の前に天使が現れたら人間はどんな反応を見せるだろう？
もしもアナタの前に天使が現れたらアナタはどんな反応をする？

一般的にどのような反応を見せるのか知らないが、カメ子の反応が一般人からずれているのはなんとなく分かる。

カメ子は

お腹を撫で始めた。

カメ子は何やってるんだ？

「何やってんだ？」

カメ子は自分の腹を見つめていたが、俺の声に顔を上げた。
「何って、お腹の中に赤ちゃんがいるんだなーと思って」

「赤ちゃんがいる!？」

突然何を言い出すんだこの女は……？

「だって目の前に天使が現れるなんて受胎告知しに来たってことでしょ？ だから私のお腹の中に第二のイエス・キリストが宿って」
「る訳ないだろ!!」

どうしたらそういう結論にたどり着くんだ？

駄目だ、カメ子の思考回路が解らない……。

「イエス・キリストが宿ってないんだったら……」

カメ子はしばらく考え事をしていたが、何か閃いたのか顔を輝かせた。

「分かりました！ 私戦いますっ!!」

聴きたくない。

「私はジャンヌ・ダルクのようにこの日本を救ってみせます!!」

あー… 聴こえちゃった。

何だろう、この疲労感……。

カメ子は勢いよく俺を振り返る。その表情は生き生きとしていて、先程バスケの試合に出ていたグズ女と同一人物だと思えなかった。

「さあ天使さん！ 私に御告げをっ！！」

「その口を閉じて真っ直ぐ病院に行くように」

「何科ですか？」

「その妄想全開の頭を診てもらえる所」

「ひどいですよ、天使さん。妄想ではなく空想といってほしいです」

たいして変わんないだろ。

「とにかくカメ子はマリアでもジャンヌでもないからな」

「それじゃあ天使さんはどうして」

「俺の名前は天使さんじゃなくてアキエル。“様”をつけて呼ぶように」

カメ子は俺の注文に素直に従った。

「それじゃあアキエル様はどうしてこんな所にきたの？」

「カメ子を見に來ただけだよ」

「私を？ 何で？」

第2話 カメ子登場（後書き）

大体土曜か日曜あたりに更新する予定です。

第3話 欲しいモノがある時に頼る者は……

誰かを相手に本気でツッコミをいれたり、真面目に受け答えをするなんて、全く俺らしくない。

カメ子といると自分のペースが崩れる。

これ以上この変な女と関わるのはやめよう。

俺が答えないので、カメ子はもう一度問う。

「どうして私に会いに来」

「そーいえば急用を思い出した。俺行かないと」

「急用？」

「そー。俺お仕事しなきゃいけないんだよ。カメ子なんかと話してるヒマないんだよね」

俺は早足で体育館の入り口に向かう。カメ子が後を追いかけてくる気配を感じたが、俺は振り返らなかった。

入り口を出ると、大柄な四十ほどの男がいた。俺の事は見えてないのか、チラリとも俺を見ない。俺はその男を避けずに真っ直ぐ進み

通り抜けた。

どうやら俺に触れる（が触れられる）のは、俺の事が見える奴だけらしい。見えない奴は今みたいにぶつかりもせずに通り抜けられる。

俺、幽霊みたいじゃん。一応天使なのに。まあ幽霊も精神体ばいっし、構造はおんなじようなもんなのかもしれない。

考え事に適当に結論をつけると、カメ子が男に怒鳴られていた。男は教師なんだろう。

「亀山ー、今何時だと思ってる！！ 授業が始まってるぞ！！！」

俺は教師の声を背に、この学校を後にした。

街中に出たはいいものの

つまんねえええええ。

精神体では何も出来ない。

さっきまでファミレスの中にいた。でもこの身体では、食事も出来ない。それなのに匂いは嗅ぎとれる。

あれは責め苦以外のなにものでもない。

肉体さえあれば、こんな苦しみを味わらなくて済むのに。

だったら……

肉体を手に入れればいい。

そして欲しいモノがあるならば

悪魔に頼ればいい。

俺は人の背中に張り付き、信号無視を唆していたたっぱの小悪魔を乱暴に剥がした。
バリツと音がする。そうとう強く張り付いてたみたいだ。

剥がした小悪魔を近くに放り投げた。
今度はゴチツと音がする。顔面を地面にぶつけた小悪魔はかなり痛かったのか、顔を両手で押さえながらしばらく地面を転がっていた。
その後少しの間静止しガバリと起き上がった。

「なにしゃがんでえ！！ 俺様を誰だと……！！」

俺を見た小悪魔の言葉が止まる。

俺は極上の笑みを浮かべ、冷たい声音で言う。

「誰に向かって言ってるの？」

小悪魔は恐怖に顔を引きつらせながら、必死にペコペコと頭をさげる。

「申し訳ありませんアキエル様！！ この愚かな私をお許し下さい
！！！」

「許してやるからバアル呼んでくれない？」

第3話 欲しいモノがある時に頼る者は……（後書き）

今回話短いです。本当ならバアルがでてくる予定だったのに、時間が……

第4話 散々な1日やんす……

「バアル……？」

子悪魔は腕を組み、首を傾げた。

「すみませんアキエル様。アツシには誰だか分からねえです……」
申し訳なさそうに言う。

俺は呆れた。

バアルを知らないなんて、コイツは本当に悪魔か？
俺は首から下げていたネックレスの中から、剣を型どったモノを外した。

銀で出来た剣のアクセに気を込める。

手のひらに収まるサイズのそれは、瞬く間にひと振りの剣となった。
剣の切っ先を小悪魔の首に突きつける。
小悪魔がヒイイと情けない声をあげた。

「バアル」ゼブスを本当に知らないのか？」

「バ、バアル」ゼブス……？ …………… あー！」

長い沈黙の後、何かを思い出したのかポンと手を打つ。

「バアル」ゼブス、思い出しやした！ それにしてもずいぶん古い
名前やんすねえ。今はベ……ギャツ……！」

小悪魔の首に突きつけていた剣が、皮膚を薄く切り裂いた。傷口か

らポタツと、一滴血が落ちる。
俺は冷たく言い放つ。

「その名前を言うな。次に口にだしたら……」

「だ、だしたら?」

小さく震えながら小悪魔が聞く。
だから俺は答えてやる。

「串刺しになると頭と胴体が二つに分かれるのとどっちがいい?」

「両方共ゴメンでさあ!!!!」

ブンブンと首が千切れそうなほど左右に振る。そんな小悪魔に再び
剣を突きつけた。

「とにかくさつさとバアル呼んでこい」

「それはム、ムリですぜアキエル様! ベ…バアル様のような上級
悪魔をアッシのような下級悪魔が呼びに行くなんて……無謀にもほ
どがありやす!! 死に行くようなもんです!!」

「じゃあ今ここでその命を断ち切って」

「行つてきやーす!」

ドロンと黒い煙と共に小悪魔の姿が消えた。地獄に戻ったのだろう。

あの小悪魔が戻ってくるまで、しばらく時間がかかるだろうな。戻ってくるまで一眠りするか……

道端の木に寄りかかる。睡魔はすぐに襲ってきた。体調が悪くて翔べず、徒歩だったから疲れが溜まっていたのだろう。

俺は浅い眠りについた。

アッシは地獄から戻ってきやした。

身体は傷だらけのボロボロで、尻尾はちょんぎれて全くヒドイ有り様でやんす。これは全てベ…バアル様の手下にやられやした。（べの方の名前で呼んだらアキエル様に殺されてしやいやす）まあバアル様の居場所はなんとか聞き出せやした。

地上に出かけていて、なんと人間に会いに行ってるでやんす！！バアル様ほどの悪魔が会いに行くなんて、どんな人間やんですかねえ。

つと、見えてきやした。

銀髪に血より紅い瞳の長身の男性。バアル様やんす！さすが上級悪魔だけあって凄まじい魔力やんすね。近づくだけで身体が消し飛びそうやんす。

それなのに、こんな凄い上級悪魔と向かい合って話しているのが人間の小娘！！

なんなんやすか、この地味でトロそうなカメ女は！！ バアル様はこのような小娘ごときが口をきいていい存在じゃないやんす！！

でもこの小娘にバアル様は会いにきたやんすよね……。一体何の用が……。

ちよつとぐらい盗み聞きしてもいいやんすよねー！

第4話 散々な1日やんす……（後書き）

月とスッポン！

アキエル 「月とスッポン！って何だ？」

カメ子 「ふふふ、それはですねえ……」

アキエル 「って何で俺達が後書きに出てんだよ……!?!」

カメ子 「作者の夢の一つなんですよ」

アキエル 「夢？」

カメ子 「自分のキャラを後書きに登場させたいっ！ という作者の夢です！ おかげで久しぶりに私登場出来ましたよ……!」

アキエル 「読者に怒られても知らないぞ」

カメ子 「えっ!?! 怒られちゃうんですか？」

アキエル 「こんな後書きに時間を割くぐらいなら、本編を書け！
！ って」

カメ子 「それは……後書きもそれなりに大事だと私は思います……」

アキエル 「自信無さげだな」

カメ子 「と、とにかく『月とスッポン!』は私とアキエルが中心になって、キャラのプロフィールとか裏話的な事とかを紹介したりするコーナーです!」

アキエル 「そんなもの知りたい読者がいるのか?」

カメ子 「いると信じましょう!! でないと哀しいですよ……」

アキエル 「まあそうだな。俺のプロフィールを知りたい読者ぐらいいるだろ じゃ今日はこれで終わりにするぞ」

カメ子 「あつ、私まだ喋りた」

第5話 バアルを止める

バアルがいる

俺は浅い眠りから醒めた。

この魔力

間違いない。バアルだ。

もたれかかっていた木から身体を起こす。少し身体を休めたおかげか、吐き気と頭痛も多少収まった。今ならなんとか翔べそうだ。

バアルの魔力はここから離れた場所に感じられる。小悪魔が呼んだわけではないようだ。

魔力の位置を探る。魔力は俺が先ほどまで居た場所 中学校に感じられた。

まさか

信じたくないが

カメ子に会いに。

「冗談じゃないっ!!」

バル（アイツ）がカメ子に会いに行ったら

カメ子に余計な事を吹き込むに決まっている!!!

しかもそれが俺のためになると思って!!

阻止しなければならない。

地を蹴り空に翔び上がる。全速力で中学校へ向かった。

周りの景色は現れたと思ったらすぐに後ろに過ぎ去って行く。

中学校までへの道のりはさして遠くないはずだった。しかし気が急いでいる今は遠く思われる。

長い時が過ぎたように感じられて、やっと中学校が見えてくる。バルの気配は校門の辺りにある。

俺は校門を目指して翔んだ。

校門の前にはカメ子とバルがいた。近くの茂みに隠れるように小悪魔も。

「バルっっ!!」

俺の叫び声にバルは空を見上げ

俺と目が合った瞬間に黒い煙と一緒に消えた。

地獄に逃げやがった。

俺は舌打ちをして地上へと降りた。

小悪魔もいつの間にかいなくなっていた。俺の姿を見て逃げ出したんだろう。

俺の側にトテトテとカメ子が寄ってきた。

「探そうと思ってたんですよアッキー！！ 私に会いにきてくれたんですねっ！」

誰がアッキーだ。そもそもカメ子に会いにきてないし。

「カメ子」

「はい？」

「バルはお前にどんな話をした？」

「バルさんのお話ですか？ それはですねえ……」

えへへと照れたように笑う。

「『カメ子ちゃんとアキエルはラブラブでお似合いのカップルに見えるね』って、イタタタ！！痛いですアッキー！！」

「俺はカメ子の妄想話は聞いてないんだよね」

俺は笑いながらカメ子の右耳を更に引つ張る。

「正直に言わないと左耳も……」

「ごめんなさい！！天使と恋人だったら楽しそうだなっていう願望が出ちゃいました！！正直に言います！！」

涙目になって謝ったので許してやる。右耳を離れた。カメ子の右耳はすっかり赤くなっている。

「それじゃカメ子の妄想無しに話してもらうか」

「はい……」

カメ子は右耳に触れながら、コクリと頷いた。

第5話 バアルを止める（後書き）

月とスッポン！！

アッキー 「今回も本文は短いな。1週間も読者を待たせてこれじや怒られるぞ」

カメ 「実は作者が他の小説を書いてて、カメ子と天使を書くの忘れてたんですよ」

アッキー 「他の小説？」

カメ 「連載を休止していたのがあるじゃないですか。その小説の続きを書いてたらしいですよ」

アッキー 「へえ…カメ子と天使を忘れてねえ…作者いつペンシメとくか」

カメ 「アッキー怖いです。顔が笑顔だし…作者は一応第6話はどう少し長く書く予定らしいですよ」

アッキー 「まあ駄目作者の事だからあんまり期待はしない方がいいな。」

カメ 「コホン。そろそろカメ子と天使の裏話とか始めましょう」

アッキー 「そうだな。でももう時間切れだ」

カメ 「ええっ!？ そんな、まだ話し」

次回に続く

第6話 死の時間

「バアルさんと話した事と言っても……」

カメ子はうーんと考え込む。

「『アキエルの事を嫌わず、仲良くして下さい。アキエルにはカメ子ちゃんが必要なんです。』って言われた事と」

バアル……

やっぱり余計な事を言っていた。

カメ子は言葉を続ける。

「後は『死の時間になる前に学校から出て下さい』って言うてました」

「死の時間？」

何の事が分からないが、学校を今すぐ出れば問題無いだろ。

「おいカメ子。さっさと学校を……」

「『アツキーには私が必要』なんて言われちゃった！もしかして私達運命の恋人だったりして！！『運命』……なんて素敵な響き……。私達きつと赤い糸で結ばれてますね……！！」

俺の言葉なんて聞いてなかった。

妄想するのは勝手だけど、口に出すな！

なんてこの状態のカメ子に言っても馬に念仏だろう。

俺はカメ子の妄想が途切れるのを待つ事にした。

.....

帰宅する生徒達が変な目でカメ子を見ながら通り過ぎた。

.....

部活に勤しむ連中が訝しげな目でカメ子を見ていた。

.....

もうカメ子なんて放っておいて帰るか。

クルリとカメ子に背を向けて歩く。

校門から校舎が続くまでの道。その両脇には桜の木々が並んでいる。四月の上旬なら桜の花が見物だったろう。今は五月。桜の花は散つて、葉桜となっている。俺は葉桜を見ながら歩き、校門まであと一歩のところでガシッと腕を掴まれる。

首だけ振り向くと予想通りカメ子が腕を掴んでいた。

「アツキー、どこに行くんですか？」

「カメ子のいない所かな」

俺は腕を振ったが、カメ子はガツシリと腕を掴んで離さない。

「『私がない所』なんて、冷たい事をどうして言うんですかっ！ 私達運命の恋人でしょ！？」

俺はパニックになっているカメ子を残し、翼を羽ばたかせる。
足が地を離れた。そのまま大空へ翔びたとうと

キンコンカーンコン

四時のチャイムが鳴った。

四（死）の時間

第6話 死の時間（後書き）

体調を崩してしまい、本文短めになってしまいました。
月とスッポン！もお休みです
すみません……

第7話 お姫様抱っこ

チャイムがなった途端空気が変わった。
重苦しい、息が詰まるような感覚。

視線、視線、視線、視線。

視られている。

校舎の窓から。

校庭から。

生徒と教師が動きを止めて俺とカメ子を凝視している。
皆、敵意を剥き出しにして。

その肩や背中に低級悪魔がくっついていた。

学校にいる俺達以外の全員に悪魔が憑りついてるなんて、偶然でもあり得ない。

そう、誰かが仕組まないかぎり。

『コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ　　！！』

悪魔に憑りつかれた人間達が、口々に叫び始めた。

殺せ、殺せの大合唱。大勢の人が声を出しているはずなのに声は一つとして乱れることなく、重なった声はたった一人が声を出しているんじゃないかと思いたくなるほどピッタリだった。

「アッキー、みんなどうしちゃったんですか？」

パニックから立ち直ったカメ子が聞いてくる。俺も今はふざけてい

る場合じゃない。

「悪魔に憑りつかれてる。ひとまず逃げるぞ」

悪魔憑き達は、ギラギラと獲物を狙う眼でこちらを視ていた。

校庭にいるのだけで、ざつと二十人はいるんじゃないか？　いくら俺が強くても、この人数＋お荷物のカメ子がいる。不利だ。

「アツキーここ通れません！　不思議体験です！！」

校門に走り寄ったカメ子がぺちぺちと見えない壁を叩く。俺達が外に出れないよう、ご丁寧にも結界を張ってくれたらしい。

「外に出れないなら……」

俺は道を振り返る。ジリジリと悪魔憑き達が俺とカメ子を囲んでいた。

残された道はこの突破。

やだな、めんどくさい。

まあめんどくさいからってコイツらに殺されたくないし、やるしかないな。

「カメ子、ちょっと来い」

カメ子に手招きする。カメ子は校門から離れるとこちらへ来た。

「何か用ですか？　あつ、もしかして私に愛の告白！？」

「んなことしないって」

カメ子の頭をげんこつで殴る。ゴチツといい音がした。

「痛いすつ！ これ以上お馬鹿になったらどうするんですか！」

涙目になったカメ子。相当痛かったらしい。

「ところでカメ子、お前足速いか？」

「足、ですか？ 自慢じゃないですけど、かなり遅いです！ クラスでビリですから！！」

クラスでビリって……。走って逃げても、カメ子は悪魔憑きに追いつかれるな。疲れるけど、あの方法でいくか……。

「カメ子、行つてこい」

「え？ 何処へで、つてアッキー？ 何するんですかっ！？」

カメ子をひょいと持ち上げる。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。カメ子は頬を赤く染めた。

「足の遅い私を、アッキーがお姫様抱っこで運んでくれるんですか！？ お姫様抱っこしてもらうの夢だったんですよー！！」

「運ぶわけないじゃん。カメ子重いし」

「お、女の子に重いなんて言っちゃ ふきやあああゝゝ！！！！？」

言葉の途中で俺は、カメ子を悪魔憑き達の方へ空高く放り投げた。

第7話 お姫様抱っこ（後書き）

月とスッポン！

は作者の都合により終了します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8613d/>

カメ子と天使

2010年10月28日05時46分発行